

# じじじろ、じじろ

作：清野 和也

## ◎登場人物

石（性別不定 ※劇中は男として描いているが女性でも可）

男（男）

村人（男）

嘉永年間（1680年頃）の冬。福島市の荒川（現在の大森川）のほとりにて。

舞台上には小さな石

ころがうずくまっている。急に連れてこられたよ

うで、あたりを伺っている。

どこからか声が聞こえる。この里の、あめつちの声だろうか。

「石ころ ころろ ころろ ここに ここどこ ころろ

石ころ ころろ ころろ ころろ ころろ

石ころ ころろ かぜふくしまの かわの きしべに

そらつち あめ やまゆき ころろころろ」

その声を遮るように男

性の声

男 石 今日からお前には、立派なお地藏さまになってもらう！

男 石 お地藏さま？

男 石 しっかり励むように

男 石 待って

男 石 あんたが僕をここに連れてきたんですか？

男 石 いや、

男 石 目が覚めたらこんな目立つ道端に置かれてて。戻してくださいよ！元の場所に

男 石 俺じゃない

男 石 だいたいお地藏さまってなんですか？

男 石 地藏菩薩さまだ。人々の苦悩を慈悲の心を持って包み込む

男 石 何だよ、慈悲って、苦悩って

男 石 難しいことは良いんだ。ようは人間の苦しむ気持ちを癒やしてさしあげるの  
だ！

ころろ、ころろ



石を拝みだす男

急に止めて!!

一度拝まれたからには取り返しはつかない。恨むなら天を恨め!

あんたが勝手に拝んだんだろ。嫌だよ

嫌だろうとなんだろうと

とにかく僕は石ころのままです、だから

ええい、これ以上言うなら力づくだ。・・・砕くぞ! 良いのか

ええ

お前の石ころ人生、終わりにしてやる!

わかった、わかったよ。でも、どうすりゃいいんだ! おかるの霊を鎮めろとか。

いくら人間に拝まれたって、ただの石ころにはどうしようもないだろ

・・・だから、ただの石ころじゃなくて、立派なお地藏さまになれば良いんじゃないの?

だから、そのためにどうすればいいの?

・・・?

今日からお前には、立派なお地藏さまになってもらうって言ってなかった? 大

層なこと割った割に、解らないんじゃないだろうな

・・・お地藏さまになるために必要なこと!

必要なこと!

ほほえみ!

ほほえみ?

お地藏さまといえば、ほほえみだ

はあ

その優しいお顔立ちで、見る人々の心を癒やすのだ

こ、こうか?

もっと目を細めて

こう?

表情が硬いなあ。石みたいだ

石だからね

柔らかな・・・そう、そうだ・・・そう・・・

これでいいのか

いや、どうだろう

わかっているのか、本当に

なにが

お地藏さまに、どうしたらなれるのか



だど。

切支丹ってのは？

エスさまだとか、キリストさまだとか。この国のものでは無い別の神様を祀って奴らのことだ。邪教を信じることはいけないことだ。だから、父親が殺され、おかるもその罪を着せられたのだと

それでなんで殺されなければならぬんだ？

解らない

それなのに

女性の声のような、風の音が聞こえる

「さわさわ　ぎわぎわ　ふうからら　ひゅうとと

さわさわ　ぎわぎわ　ふうからら　ひゅうひゅうとととと」

翌朝、おかるが埋まっている場所に行った。鋸引きの刃は切れ味の悪いものを使っている。ゆっくりと苦しませて殺していくためだ。おかるの首の傷には虫が湧いていた

ずいぶんひどいことをする

おかるは『殺してくれ』と言っていた

そうして

一太刀で斬った

叶えてやったんだな

ああ

崇られているってのはその代官？

そして、父親を殺した下役人だ

崇られたってしょうがないだろ

お前もそう思うか

そりゃあそうだ

救われないだろうか

誰が？

いや、

おかるの気が済んだら、いなくなるだろう。その役人と代官が死んだら

役人はすでに死んでいる

それじゃあ、あとは代官が死んでお終いだ。僕がお地藏さまになることなんてな

い

頼む。このとおりだ

なんでお前が頼むんだよ



石 旅の者の格好などをして・・・  
好いてしまったのか

男 悲しい過去があるはずだが、感じさせずよく笑う子だった。ああ、俺たちは、惹かれ合っていたのかもしれない

石 おかるも？

男 おそらく。店を閉めたあと、ふたりでこっそり河原に抜け出し話をした

石 秘密の話を

男 おかるの故郷の島原のこと、家のこと。エス様のことや、天草という一揆の首謀者のことも

石 お前も邪教に入ったのか？

男 まさか。ただ、おかるが小さな声で歌ってくれた讃美歌は、美しかった

風の音は囁くような賛美歌グレゴリオ聖歌の歌に

男 石 男 そのうちに、茶屋が閉まった  
どうして

男 父の病が悪化したのだという。良い医者を教えようと言った。だが、おかるは、それだけではないと笑った。里の人たちがね、と。言葉は交わすが、会話ではない。こちらを見ているが、視線はそらす

石 切支丹の、島原の娘だからだと

男 御公儀が彼らを、彼女らを世の異物にしたんだ

石 島原と言うだけで

男 なんとかしてやりたかった。俺は身分を明かした。森合の代官であることを

石 驚いただろう

男 そうして、俺の嫁になってくれと頼んだ。さすれば、不便はさせないと。島原の女であることを、陰口叩く里のものにも文句は言わせない。父の病も診る

石 喜ぶだろう

男 そう思った。だが、おかるは悩んでいた

徐々に石がおかるになっっていく。祈りを捧げるおかる

男 石 男 そこで余計な言葉を投げてしまった。切支丹も、島原も捨ててしまえと  
そうすれば何不自由なく暮らせる

石 だが、おかるにはわかってもらえなかった。石 頭が！俺は、お前を救ってやろうと、

あなたに救ってもらわずとも結構

また風の声が聞こえる

男 そのうちに、父が誰かに殺された。役人が切支丹を征伐したのだ。村人たちの言うような、俺が命じたということはない

石 なかったのだろうか、本当に？

男 おかるが俺の前に連れてこられた。父殺しをしたのだと

石 救ってやれなかったのだろうか

男 切支丹かと俺は聞いた。首を横にふっつてくれるだけでよかった。それなのに、おかるは、ゆっくりと

石 思い出したかのようにうなずいた

男 お前は、島原の出かと続けて問うた

石 おかるは、首を縦に振った

男 横にふっつてくれるだけで良かった。さすれば、なんとか出来たのだ。ただの切支丹なら、俺がその心根を変えてやると言い切った。だが、島原の切支丹はだめだ。島原は……。父殺しをしたのか？と問うとまっすぐに一点を見つめていた

丸い石がまるで土から生えた首のように見える

石 ずっとひとりだったんだな。ひとりぼっちで

男 ……はじめは、代官として見に行っただ。何も話してやくれなかった。次の

石&男 日は旅の者の姿をして会いに行った

鋸引きの刃は切れ味の悪いものを使っている。ゆっくりと苦しませて殺していかためだ。おかるの首の傷には虫が湧きはじめていた

石 殺してくれ

男 と声を聞いた

石 俺はその首を、撥ねた

太刀を振り下ろす男

石 俺がこの石をここに置いた

男 ああ

石 おかるのためだろうか

男 いや

石 痛みを誰かに語りたかったのだろうか

男 里の者の間ではな。罪人を、島原の切支丹を、祀ってはならぬと。殺した代官に

石 目をつけられるなどと言っているそうだ。名を刻む墓も何も作らないらしい。な  
らばせめて、川原の石なら許されるだろう。悼むことを許してくれるだろう  
石 わかったよ。ひとつ  
男 何がわかったんだ  
石 お地藏さまというのは、残された人々のためにあると  
男 もしかすると、おかるは、本当に父を殺したのかもしれないと、思っている。そ  
うさせたのは誰なのだろうか

再び聞こえてくるグレゴリオ聖歌

男 ……切支丹の言葉では、懺悔（ざんげ）というとか、聞いたことがある

男、ゆっくりと、自分の腹を割こうとするが、聖歌に気づき、はたとその手  
を止める石の根本を、おかるの首元のように優しく撫で、自分の首に刀を当  
て、掻っ切る。赤い血が石にかかり、地藏を守る布のようにもみえる

男 雪が、初雪が、あづまのお山から降りてくる。島原は、雪は降らぬ里だったろ  
うか。寒かろうか、寒かろ

男、おかるの石を抱くようにして暖める。村人がその姿を見つけ、駆け寄って  
くる

村人 お代官様！！お代官様……！まただ。こりゃまた、おかるの祟りだ！おかる  
の！おかるの……！

かすかに、吾妻山からおりてきた、雪の音が聞こえている

「しーーーーっ さら さら さら

しーーーーっ すっ さらら

劇終